

# リルケとエジプト

熊 沢 秀 哉

## Rilke and Egypt

Hideya KUMAZAWA

### summary

This essay discusses the bearings of Egypt on Rainer Maria Rilke. Rilke did not have a “home” throughout his life, and spent much time on travels. Among his many experiences in foreign lands, his visits to Russia in his younger days and Egypt in his middle age are said to have influenced him most. The significance of his visit to Egypt, however, has not been fully discussed, because there remains little documents about the visit. By using the newly compiled documents in Gemany, this essay inquires into the significance of Egypt for Rilke.

### Key words

R. M. Rilke, Egypt

#### 1. リルケとエジプト的なものの関係

リルケの詩作品には、エジプト的なものの影響が明確に見られるものがある。このことには、異論を差し挟む余地はない。一読すれば分る例を挙げれば、『新詩集』の「スカラベ」、あるいは『ドゥイノの悲歌』における第10悲歌などがそれに当たり、その他、詩の主題を構成する程ではないものを含めれば数はさらに増える。本稿は、この、リルケの作品とエジプト的なものの関係を考察するものである。従来の研究においては、リルケとエジプトの関係を論じるものは少数に止まっている。その理由としては、まず、リルケのエジプト体験がどのようなものであったかを示す資料が充分ではなかったことが挙げられるだろう。しかし、この分野では、1997年に Alfred Grimm の優れた研究が現われ<sup>(1)</sup>、リルケが訪れた当時のエジプトの写真も含めて、現在収集可能な限りの資料を提供してくれている。本稿は、資料面においてはこの Grimm の研究を土台として、  
することを附言しておきたい。

リルケの作品とエジプト的なものの関係に対する考察を行おうとする場合、「エジプト的なもの」の内容規定が必要となってくる。「エジプト的なもの」という形容は本来非常に幅広いものであるが、19世紀末から20世紀初頭にかけて活動した詩人であるリルケにとってのエジプトという限定を与えれば、それは、ほぼエジプト文化、それも古代エジプトの文化とその背景を成す世界観と言い換えることが出来る。後述するように、リルケはエジプトの地を直に体験しているのだが、その際にも20世紀初頭におけるエジプトの社会状況、近代化されたヨーロッパ諸国から見ればあまりに貧しい民衆の暮らしなどといった領域には殆ど関心を払っていない。リルケの関心を引く

のは、常に自らの詩作に関係のある、エジプトの風景であり、古代エジプトの遺跡、彫像、レリーフなのだ。また19世紀後半からヨーロッパ人によるエジプト発掘調査が本格化しており、パリのコンコルド広場に置かれているラムセス二世時代のオベリスクの例を代表とするように、大量の古代エジプトの美術品がフランスやドイツ、イギリスに流出している。リルケは、パリのルーブル美術館やベルリンのエジプト博物館でこれらの発掘品にいち早く接しており、大きな感動を得ていることを述べている<sup>(2)</sup>。

リルケの作品に現われるエジプト的なものは、上述のように古代エジプトの、主に彫刻を中心とする美術品とそれらを生みだした風土の、リルケ自身による直接的体験を基にするのだが、全ての要素がそれに集約されるわけではない。例えば『新詩集』の「エジプトのマリア」や『マリアの生涯』の「エジプトへ逃れる際の休息」のように、故事伝説や新約聖書およびその外典を基にしたものもある。本稿では、この系統の作品を前者のものから切り離し、考察の対象外とする。新約、旧約を合わせた聖書とリルケの作品の関係は、単純なものではなく、別の観点から捉えられるべきテーマであるからだ。

A. Grimmによれば、リルケとエジプト的なものの最初の出会いは、1902年に始まるパリ滞在時におけるルーブルとロダンのアトリエであったとされる<sup>(3)</sup>。特にロダンのアトリエにあるガラス戸棚には、古代エジプト時代の様々な小物が並び、ロダン自身のエジプトへの関心の高さを物語っていた。リルケ中期の詩論の構築にあたって、ロダンのリルケに与えた影響の大きさを考慮すれば、リルケとエジプト的なものつながりはロダンを発端としていると言えることが出来るだろう。それ故、この最初のパリ滞在時におけるリルケのエジプト的なものへの関心は、レリーフや建造物も含む彫塑的なものに集中している。上記した『新詩集』の「スカラベ」が示すように、リルケはこれらを所謂「芸術事物」(Kunst-Ding)として捉えている。リルケの詩作品におけるエジプト的なものの意味を考える場合、それが単なる素材としての機能しか持っていないとするならば、そもそも考察の意義はない。Manfred Engelが述べているように<sup>(4)</sup>、中期におけるリルケは、エジプト的なものを「見ること」の詩論において芸術事物として捉え、後期においては「世界一空間」の詩論の中で捉え直している。このように、リルケにとってエジプト的なものは、単なる素材以上のものであるばかりでなく、一時期の詩論を基にした取り組みでは汲み尽くすことの出来ない広がりを持った対象であったと言えるだろう。

しかしながら、もしリルケのエジプト的なものの受容が、ロダンのアトリエを発端とする古代エジプト期のレリーフや彫像、ルーブル博物館やベルリンの博物館の展示物との関わりに止まっていたとするならば、彼の後期作品である『CW 伯の遺稿より』、『ドゥイノの悲歌』、『オルフォイスへのソネット』に、エジプト的なものの形象は現われなかったであろう。リルケとエジプト的なもの関係にとって、リルケ自身によるエジプトの現地体験は重要な位置を占めているのである。

## 2. エジプト旅行

### 2.1. リルケにとっての旅行

20歳で故郷の都市プラハを出て以来、没年に至るまで定住の地を持たなかった<sup>(5)</sup>リルケの生涯は、それ自体大きな旅、換言すれば漂泊の人生だったと言えるだろう。例えば、同時期のドイツ語圏の詩人、ホーフマンスタールの裕福さと比して、圧倒的に金銭的な余裕のなかったリルケにとって、先の予定の立たない移動と借間の生活は、経済的、心理的に厳しいものであったことは間違

いない。しかし、リルケの書簡からは、彼が孤独に浸れる静かな場所を求めることはあっても、市民生活の安定性を望んでいたというような節は全く伺われない。リルケにとって市民生活と詩的創作活動は相容れないものであった。従って、詩人であろうとすることへの強固な意志を生涯失うことのなかったリルケにとって、経済的、心理的安定性と引き替えにしても創作活動にとってより良い環境を求めての移動は欠かすことの出来ない生活条件だったのである。

1902年に、1年あまり続いた短い家庭生活を解消してパリに移って以来<sup>6)</sup>、第一次大戦が始まるまでのリルケの拠点は一応パリであったとすることが出来る。「一応」という理由は、パリの中でも転々と居を移し、また1年の内でも様々な知己を頼って、例えばローマ、ヴェネチア、カプリ島、スウェーデン、ノルウェー等に、短期から半年程度の滞在を繰り返したからである。『ドゥイノの悲歌』の第一、第二悲歌の例を代表とするように、それらの滞在地においてリルケは重要な作品を創作しており、パリは仕事をするための本拠であり、旅行は休暇というような区分は、リルケの場合全く当てはまらない。数ヶ月から半年程度の滞在期間が確保出来、リルケが望む際には、極めて限られた人間関係に逃げ込めるような「静謐な」環境が与えられれば、そこが彼にとって創作活動の拠点となり得たのである。

絶えず移動を繰り返していたリルケだが、中央ヨーロッパを出る程の大きな旅行は生涯で4度行っている。年代順に並べるなら、ルー・アンドレアス＝ザロメと行った二度のロシア旅行(1899、1900年)、エジプト旅行(1911年)、そしてスペイン旅行(1913年)である。これらの旅行と上記したその他の短期滞在との相違は、その他の短期滞在の場所がリルケにとっては創作活動の場ともなり得るいわば大きな本拠圏を形成していたのに対して、これらの旅行は、この圏外の場所への、本来的な意味における「旅行」を意味するところにあるだろう。しかし、これらの旅行もリルケにとっては仕事からの解放をもたらしたわけでは無論なく、自らの創作活動とのつながりにおいて動機付けられ、事前準備を経た上で行われたものである。そしてこれらの3カ所への旅行ともそれぞれの時期におけるリルケの詩論、芸術観に深い影響を与え、詩行の中に形象化されている。

## 2.2. クララ・リルケのエジプト体験

リルケ自身によるエジプト滞在は、1911年の1月から3月の間に行われているが、それ以前にもリルケとエジプト的なものの関係にとって重要な意味を持つ出来事が生じている。それは、リルケの妻、クララ・リルケによるエジプト滞在である。クララは、友人であるマイ・クノーブ男爵夫人から、エジプト・カイロ近郊のヘルアーンにある男爵夫妻所有の保養所に招待を受け、1907年の1月から4月始めまでの約3ヶ月間をそこで過ごしている。リルケ自身は、前年の1906年12月から1907年の5月半ばまで、カプリ島の友人宅の離れに滞在しており、クララはエジプト旅行の前後にカプリ島のリルケの下に寄っている。普段は、自分が曲がりなりにも夫であり父親であることを全く忘れていたかのようなリルケだが、エジプト旅行中にクララに宛てた手紙からは、自らもクララと共にエジプト体験を共有しようという熱意が感じられる。このリルケの態度には、妻に対する日頃の後ろめたさが半ば感じられるとしても<sup>7)</sup>、リルケ自身のエジプトへの関心の高さを示していると読むべきだろう。1907年1月20日、クララに宛ててリルケは次のように書いている。「(…)しかし僕が目を見ると、広げられた地図の、既に馴染みとなっている同じ場所に視線を向けている。それはまるで家系図のように見え、ある祖先の恐ろしく長い人生を描いた後で、最終的には幾重にも枝分かれし、拡がっているかのようだ。僕は、繰り返し、奇跡をなすこの河を眺めている。そして僕には、ますますこの河が、あの国の神々の歴史を表わしているように思

われてくる」<sup>(8)</sup>。或いは、1月28日付けの手紙には、「僕は更に世界史の本を読み続けている。ナイル河を下り終えてしまってから、君に幾つかの注釈と考えを送ることになるかも知れない。例の批判的で醒めた報告が、そのようなもの呼び起こしてくれることになればのことだけどね。僕の想像力は、それが与えられたデータを本能的に訂正し、それらを越えて測りがたいものへと進んで行く場合には、確かにしばしば正確なものを捉えるよ、——でもどんな時でも絶対確実ではないからね」<sup>(9)</sup>。これらの手紙からは、カプリー島にしながら、エジプトの地図と歴史書という乏しい資料を、豊富な想像力で補いながらクララのエジプト体験に参加しているリルケの姿が浮かび上がって来る。同時期の別の手紙でリルケは、クララに対して、兎に角出来るだけ沢山のものを見、可能であれば簡単なスケッチを描いて来て欲しいと要求している<sup>(10)</sup>。それらに対するクララの意見や感想は不要で、資料の分析は自分の所へ戻って来てから二人でやろうというわけだ。このようなリルケの態度に対するフェミニズム論的アプローチは本稿の任ではないが、リルケの家庭生活が上手く行かなかった原因は、創作活動と家庭生活との齟齬のみにあるのではなかっただろうとは言えるかも知れない。

上述した、エジプトで沢山のものを見るようにとクララに勧めている手紙の中で、リルケは次のように書いている。「見るというのは、実に不可思議なことなんだ。それについて僕たちはほとんど何も知っていない。僕たちは見ている時、全く外側を向いている。しかし僕たちが見ることに没頭している時、見られないことを望んでいた事物たちが、自ずから僕達の中に入ってくるかのように思われる。そして、事物たちが、無傷で奇妙にも匿名のまま、僕たちなしに、僕たちの内部で完成する時、外部の対象に彼らの意味が育っているんだ」<sup>(11)</sup>。また同時期に、パウラ・モーダーゾーン＝ベッカーに宛てた手紙<sup>(12)</sup>では、クララのエジプト体験は、ロダンの影響なしには成就しなかっただろうとも述べている。クララがエジプトへ行った1907年の末には『新詩集』が、翌1908年には『新詩集 別巻』が出版されており、所謂中期リルケの創作活動の真っ直中の時期に当たる。この事実と、上記の手紙を合わせれば、リルケにとってクララのエジプト体験も自らの詩論とそれに基づく世界観の中で理解されるべきものであったことが分るだろう。クララのエジプト体験に際してリルケが示した積極性と、クララに対する揺るぎない指示は、そのままこの時期のリルケの創作活動の充実を物語っているのである。逆に言えば、自らの状態が良くない時、精神的、身体的理由によって、そして周囲の環境や経済的理由によって創作活動が妨げられている時には、リルケには外的体験を受容する余裕は殆どないということになる。これは何もリルケに限ったことではなく、一般的に当てはまる事柄だが、リルケの場合、好調時、不調時の振幅の度合いが並はずれて大きいのだ。このことはリルケ自身のエジプト体験に大きな影響を及ぼすことになる。

### 2.3. 危機の時代とエジプト体験

リルケ自身によるエジプト旅行は、クララのエジプト滞在からほぼ4年後の、1911年1月から3月後半までの間に行われている。2月後半から3月後半までの1ヶ月は、体調を崩して、クララと同じくマイ・クノープ男爵夫妻の客としてヘルアーンで過ごしており、エジプトでの旅行と呼べるのは、実質1月10日から同29日までのナイル河の船旅だったようだ。ロシア旅行やスペイン旅行と比して、リルケのエジプト旅行には不明な点が多い。例えばナイル河の船旅の後、ヘルアーンへ移るまでの約1ヶ月間をどのように過ごしていたのかは、殆ど分っていない。その最大の理由は、この時期にリルケが殆ど手紙を書いていないことによる。おそらくリルケ自身が自分

をそうだと思っている程には、リルケは非社交的な人間ではなく、「孤独を好む詩人」でもない。創作活動に集中している時期には孤独が必要だから、手紙も書けなくなる、という内容の手紙を何通となく書くリルケにとっては、自分が会いたいと思う時に、自分を理解してくれる人間に会える状態がベストであり、そうでない場合の連絡手段としては必然的に手紙が最も好まれるものとなる。さらに知己を頼って滞在地を転々とするためには、遠隔地にいる友人達と常に手紙によって連絡を取る必要性があったし、出版社に報酬の前払いを頼んだり、裕福な友人達に経済的な援助を頼んだりするためにも手紙が必要だったのである。すなわち、リルケにとって手紙を書くことは仕事のためにも、明日の糧を得るためにも必要な必須事項だったわけだ。事実、エジプト旅行の前にも A. キッペンバルク宛てに執筆料の前払いを頼む手紙<sup>(13)</sup>を書いて旅行費用を捻出している。前払いの金額はさほど多額ではなく、旅行によって使い果たしてしまう程度であって、それ故旅行後の生活の当ては何もなかったのである。

クララのエジプト滞在期には、あれ程までに想像力豊かな手紙を書いていたにも拘わらず、ようやく自らに訪れたエジプト滞在の期間中に殆ど手紙を書いていないということは、この時期のリルケの精神状態が、手紙すら書くのが容易ではない程悪かったことを示している。『マルテの手記』完成後の1910年から、『ドゥイノの悲歌』や『オルフォイスへのソネット』完成までの約10年強の期間は、主立った作品の成立が見られないことから、一般にリルケの空白の時期、あるいは作家としての危機の時期として知られている。より詳細に見てみれば、この期間中に全く作品が成立していないわけではなく、1912年の初頭には、『マリアの生涯』と、更に重要なことには『ドゥイノの悲歌』の第一悲歌、並びに第二悲歌が完成している。『ドゥイノの悲歌』は周知のように、完成までその後10年を要しており、この事実もこの時期のリルケの危機を裏付けるものとして解釈する論考もある。しかし、例えば、1913年に行われたスペイン旅行は、エジプト旅行とは全く異なって、リルケによって実り豊かなものとして捉えられており、本稿で追ってきたように、リルケにとって、体験と詩人としての創作状態が密接に関連しているとすれば、この時点でリルケの状態はかなり良くなっていると推測出来るのである。おそらく、1914年に勃発した第一次大戦とそれに伴うリルケの兵役がなければ、この時期にまとまった形の作品群が成立していたに違いない。

『マルテの手記』が完成したのが1909年の末である。その後リルケは重度の虚脱状態に陥り、1910年には初夏に僅か2行の断片、8月末に10行前後の小品が成立しているに過ぎない。1911年には、作品の数はいくらか増えるものの、やはり行数の少ない断片ばかりが遺されている。Kommentierte Ausgabeによれば、1911年の11月か12月にルー・ザロメに向けて3つの連詩が書かれており、同じ時期にルーに宛てた手紙の中で、自らの芸術家として、また一人の人間としての危機について詳細な分析を加えているとされる<sup>(14)</sup>。この連詩の内容と、約2年振りに再開された自己分析的な手紙を総合してみれば、1911年の末になってようやくリルケは自らの危機と向かい合うことが出来る状態になっていたと言えるのだ。この推測は、上記した1912年の初頭に一連の重要な作品が成立している事実と符号する。

1910、1911年の2年間のリルケは、従って、自分がたった一つの詩すら満足に創作出来ない程悪い状態にあることは分っても、それにどう対処していいかは全く想像も出来ないような状況に置かれていたと結論づけることが可能だ。精神状態ばかりではなく、身体的な具合も悪く、医者に行っても原因不明の診断をうけるばかりだったようである。おそらく現代なら、各科をたらい回しにされ、10もの違った病名を付けられるような状態だったに相違ない。なぜこの時期リルケが

ここまでの状態になってしまったかについては、リルケ自身による内的分析、あるいはそれを基にした研究者の分析が諸種あるにはあるが、医者や診断がまちまちであるように、それを追求することはある意味で無駄であろう。そのような詳細な分析をさらに一つ増やす意図は本稿にはない。作品史上からの事実を基にして簡明に推察すれば、1907年から1909年の末にかけてのリルケは、『新詩集』および『新詩集 別巻』、さらに『マルテの手記』の完成に向けてまさに働き過ぎの状態で、その後の2年間にその反動に襲われたということである。さらに、『マルテの手記』の完成をもって、作家としての一時期の終わり、すなわち作風の変化の時期を迎えていたとも言えるだろう。つまり、重度の疲労に加えて、新しい詩論も構築しなくてはならず、その意味では当に危機的な状況であったことは間違いない。しかし、リルケ研究において頻繁に語られるように、このリルケの危機が、『マルテの手記』の主人公マルテの没落を契機にするという解釈には賛同しかねる。リルケ自身もこのような自己解釈を試みた節が見られるが、これは精神的に自己同一性の危機にある当人が求める内的必然性の類と考えるのが妥当であろう。

リルケとエジプト的なものの関係を見る際に重要なことは、リルケのエジプト旅行が上述してきたように、最悪のタイミングで行われたということだ。旅行の動機も、兎に角途方にくれた状況から逃げ出したいという色彩が強く、結果として更に悪い状況を招きかねないものであった。旅行には同行者がいたらしい。しかし直接リルケを招待したのが、裕福な毛皮商人の妻、ジェニー・オルタースドルフであったということ以外殆ど不明である。このジェニーとリルケの関係も良く分っていない。おそらく数多くのリルケの恋人の一人であっただろうという推測は成り立つが、およそリルケと同種の気質を持つタイプであったとは考えられず、このこともこの時期のリルケがいかに自分を見失っていたかの傍証になるだろう。恋人関係を解消してからも生涯連絡を取り続けた、ロシア旅行の同伴者ルー・ザロメとは好対照をなす人物であったようだ。上記したように、エジプト旅行のメインは、カイロからアスワンまでナイル河を溯る船旅だったが、これもリルケの趣味とはかけ離れた、今日のツアー旅行の先駆けとも言える団体旅行だった。A. Grimmの本には、この船旅の詳細な行程が、豊富な写真資料と共に記されている<sup>(15)</sup>。それを見ると、現代のバックツアーと比べると大分緩やかではあるが、それでも連日の移動と朝早くからの観光の連続である。現代であればバスで移動するところを、当時は目的地までラクダかロバでの騎乗の移動が通常であり、それも連日のこととなれば、人並み以下の運動能力と体力しか有さなかったリルケにはかなり辛い行程だっただろう。船旅の後半には、遺跡観光に加わらず、船の甲板で頑張っていたという<sup>(16)</sup>リルケの内心には、ロバに乗るのはもうご免被りたいという気持ちもあったに違いない。

以上のように、リルケにとってのエジプト旅行は最悪の時期、環境で行われたものであったが、それでも自ら体験するエジプトの風景、スフィンクスやピラミッド、圧倒的な規模の神殿遺跡はリルケの想像以上の「エジプト的なもの」であることは、後に成立したエジプト関連の詩行が示している。ナイル河の船旅の途中で書かれた手紙は、クララ宛での僅か2通しか遺されていないが、その中でリルケはエジプトで見た風景や遺跡についての描写を試みている。しかしそれらは、1907年のクララのエジプト滞在時に書かれた手紙と比較して平板で、単に見たものの羅列に止まっている感を拭い得ない。おそらくリルケにとってもそのような手紙しか書き得ないことは不本意であり、その結果クララ宛で以外の手紙を書かなかった、或いは書けなかったのに相違ない。目の当たりにするエジプトの風景は圧倒的である。しかしそれらと感応すべき詩人としての世界観、詩論が崩壊している状態では、それはリルケにとって有機的な「体験」とはなり得ないのだ。船

旅を終え、カイロ近郊のヘルアーンでクノーブ男爵夫妻の客となって Al Hayat ホテルに落ち着いてから、リルケは何通かの手紙を書く。エジプト滞在で持ち金を使い果たしたリルケにとって、危急の要件は金策である。書店主キッペンベルクや有力な援助者であったフォン・デア・ハイト夫妻宛てに、援助がなければエジプトを離れることも出来ない窮状を訴える手紙が残されている。その中でリルケは、今度の旅があまり上首尾ではなかったことを報告すると共に、今の自分の状態についてある予感を表明している。キッペンベルク宛の手紙では、「私は、不確かながらも望み、また想像したのです、昨日と今日の間になんかが聳え立ち、私を内的に分断したことを。今、私は峠を越え、全ての力を振り絞って新しい頁へと向わざるを得ないのです」<sup>(17)</sup>。またフォン・デア・ハイト夫妻に宛てた手紙でもほぼ同様に、「途方もない出来事が昨日と今日の間積み重なり、それらの整理はまだ全く出来ていませんが、今私は私の分水嶺に差し掛かっているのです。そして私にはおそらく、新しい斜面へと流れ落ちていく以外に出来ることはないのです」<sup>(18)</sup>。上述したように、リルケの危機の期間が1910年の初頭から1911年末までの2年間だとするなら、エジプト滞在時はその中間点にあたり、その意味でもこの旅行が所謂どん底だとするリルケ自身の予感は正鵠を得ている。更に、受容する側であるリルケの体勢が整っていないにも拘わらず氾濫するエジプトの詩的イメージとオリエンタリズムの無秩序、旅行環境の悪さ等は、リルケの詩的な自己同一性を完全に破壊してしまう。元々悪い状態だった所に、とどめを刺す結果になったとも言える。それ故にこそリルケは、古い自分に戻るのではなく、新しい自己へと踏み出す決意を持たざるを得なかったのだ。この意味では、リルケのエジプト旅行にはいわば逆療法的な効果もあったと言えるだろう。

繰り返しになるが、リルケのエジプト体験は、タイミングとしては最悪の時期になされたものである。その結果、研究の側にとって、残された資料の乏しさも加わって、それはロシア旅行やスペイン旅行に比して軽視されがちなものとなった。しかし、リルケにとってエジプト的なものは、ロシア的なものに勝るとも劣らない重要性を持っている。それはリルケが、フォン・デア・ハイトの援助によって這々の体でパリに戻ってからも、エジプトへの興味を失わなかったことにも示されている。峠は越えたとは言え、エジプト体験から得た印象を直ちに詩的形象へと変容させる状態ではなかったリルケは、エジプトへの興味を学問的な研究への接近<sup>(19)</sup>によって深めようとしている。また、ベルリンのエジプト博物館に展示される古代エジプト期の彫像からも強い感銘を受けたことは上記した通りだ。実現寸前まで行った、タクシス伯爵夫妻との再度のエジプト旅行と同様、エジプト研究への接近の試みは計画倒れに終わったが、リルケの手元には小さなエジプト関係の手文庫が残ったようだ。リルケとエジプト的なもののつながりは、このように、彼自身によるエジプト体験の他にも多岐に渡っている。しかし、学問的な知識から得たものは別としても、手紙の中で何度となく熱意を持って語られている、ベルリンの博物館で出会った Amenophis IV-Echnaton の頭像も詩行の中に完成した形で直接形象化することは遂になかった<sup>(20)</sup>。それに引き替え、『ドゥイノの悲歌』や『CW 伯の遺稿より』で形象化されたエジプト的な風景は、リルケのエジプト体験から生まれたものであることは明らかなのである。

### 3. 詩行に見られるエジプト的な形象

前章までで考察してきたように、リルケの作品に現われるエジプト的な形象は、聖書その他の故事に由来するもの、事物としてのエジプト的なものを対象とするもの、そしてリルケのエジプト体験を契機とするものに大別される。これら全てを網羅的に扱っても詩行のリスト以上の成果

は得られないし、またそのようなことは既存の研究で既に行われている。本稿では、リルケのエジプト旅行以前の詩を考察対象から外し、既存の研究では論じられたことがない新たなキーワードの下でエジプト的な形象を考察してみたい。

### 3.1. 境界

Manfred Engel は第10悲歌の注解の中で、リルケとエジプトの関係について以下のように書いている。「エジプトは、リルケにとって、生と死、此岸と彼岸を鋭く二分化してしまうキリスト教的文化に対する対立像だったのだ。なぜならエジプトにおいては、死者の国は、地上でのあらゆる生活習慣を引き継ぐ、地上の生の直接的な継承として考えられていたからである」(KA II-695)<sup>(21)</sup>。Engel 自身は、このコメントを言わずもがなであるかも知れないが、と慎重に補足しているが、確かに第10悲歌の「若い死者」が訪れる、エジプト的な形象に満ちあふれた「嘆きの国」から導かれたコメントとしては単純過ぎるかも知れない。リルケにとってのエジプト、あるいは当時のヨーロッパ人にとってのエジプトは、死と過去の国というイメージと結び付いていることは事実だろう。しかし、Engel のコメントは、例えば「リルケにとってのエジプトは、死と過去の象徴である」というような類の短絡と比すれば、重要な視点を含んでいる。それは、「境界」に関するものである。以下に後期から最後期にかけての詩論における境界とエジプト的なものつながりを見てみよう。

1922年の2月、『オルフォイスへのソネット』が成立する過程の中で生まれながら、『ソネット』には収められなかった作品の中に次のような詩がある。「その中では、境界が消えてなくなるような、魔法を我々に醸しだすがよい！／常に、炎の前に屈み込んでいる精神よ。／とりわけ、この悪しきものの境界を。／それは、じっと動かずに休らっている者をも、取り巻いているのだ。／我々を欺く、あの時間の境界の圧迫をも、／魔法の滴りで溶かすがよい！／なぜなら、アテネの日々、エジプトの神あるいは鳥は、なお、／いかに深く、我々に接合していることか。／意味もなくせめぎ合う、性の境界をも／溶かすまでは、休んではならない。子供時代の境界、そして正当で、与え続ける母達の／胎内の境界をも開くがよい。彼女たちが、空虚を恥じるものよ、／妨げとなる木材に惑わされずに、／未来の流れを産み出すように、海を増やすものよ」(KA II-278, 279)。この詩の注解の中で、Ulrich Fülleborn は、第一詩節の命令法の対象である「精神」はオルフォイスを指すものではなく、「芸術家の比喩機能をもつ錬金術師」<sup>(22)</sup>であると指摘している。オルフォイスも、あらゆる境界を越えて偏在する歌を創り出す詩人の究極の理想像であることは確かだが、Fülleborn の指摘通り、このソネットの「精神」のイメージとは微妙なズレがある。おそらく、それ故このソネットは『オルフォイスへのソネット』から外されたと推測されるが、この「精神」の錬金術師、あるいは魔法使いのイメージは、最後期のリルケにおける魔術的言語の詩論に接続するものだ<sup>(23)</sup>。最後期の魔術的言語の詩論では、言語は最早象徴面を持つ具体的事物を必要とすることなく、独立した主体として詩的空間を構成し得るものとして構想され、それを操る詩人は「魔術師」として表象される。このソネットは、魔術的言語の詩の具体例あるいは実験例となる詩に加えられるものではないが、言語を対象から切り離して魔術的に取り扱う詩人の姿は既に形象化されているのである。

この「魔術」によって取り除かれるべき障壁として詩行に現われるのが、「境界」である。この詩行の「境界」と「境界を開ける」という概念を正確に捉えることは、実はそれ程容易ではない。詩行に分かりやすく現われている境界を成すものを挙げるなら、過去と現在、未来の時間の境界、



男と女の性の境界、あるいは詩行には歌われていないが、生と死の境界等になるだろう。通常の意味における境界と、それをなくすという概念を当てはめるなら、これらのものの境をなくし、同一化するということになる。しかしそのような解釈ではこの詩行は意味を成さない。過去と現在、未来の境界をなくす、あるいは男と女の境界をなくす、生と死の境をなくすという主張自体は荒唐無稽なものだからだ。

詩行に現われている境界を、後期から最後期にかけてのリルケの詩の大枠の中で捉え直すなら、それらは、厳然と存在するようでありながら、実際には頭の中で作り出される抽象的な境界であることが分る。それらをリルケは、「考え出された形姿」（第7悲歌）、あるいは、「解釈された世界」（第1悲歌）、「ただ考えられただけの」世界（『オルフォイスへのソネット』第2部22）として繰り返し否定的に形象化している。これらは、総体としては所謂後期リルケの現代批判の詩行に含まれるものだ。19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパでは、テクノロジー時代の本格的な到来が始まっており、リルケの身近でも、パリではエッフェル塔が建造され、電話が実用化され、自家用自動車の普及と自動車を使った旅行が始まり、飛行機まで飛び始めた時代なのである。これらの技術革新は、客観的事実を数量化し、物理的法則の発見、応用と、演繹的計算を用いなければ成立しなかったものだ。この技術革新が、非常に専門的な分野に限定されているならば、これらに対する批判はリルケの詩行に登場することもなかったであろう。問題は、これらの技術革新が、日常生活の領域にまで影響を及ぼし始めたことにある。すなわち、技術が経済と結びつき、大量生産、大量消費の時代が始まり、日常生活にまで数量化の波が波及し、あらゆるものの画一化が進行しつつあったのだ。しかも、この変化は主体であるべき人間にまで影響を及ぼし、画一化の波からは、本質的には誰も逃れることが出来ないのである。リルケはこのような時代を「形象なき行為」（第9悲歌）の時代とも言っている。

詩行の中で開かれるべき境界として言挙げされているものは、差異としては自然に存在するものだ。過去と現在の区別、男と女の区別、生と死の区別はどのような文化の世界観の中でも存在する。リルケの要求は、このような差異をなくす所にあるわけではない。問題は、近代の技術革新の大衆化の中で、数値に置き換えることの出来る対象と数量化出来ない世界の境界が明確にされ、さらに数量化不可能な世界が排除されてしまうことにある。これは言うまでもなく、一方では科学的考察の根本的手法である。上記したように、この科学的手法自体の意義が問われているわけではない。科学本来の領域では、人間の精神に関する目に見えない世界、宗教や芸術、伝統など、の価値を否定しているわけではなく、それらの巨大な影響から科学的考察の対象となるものを取り敢えずカッコに入れるという認識を持ったに過ぎない。換言すれば、ガリレオの例を出すまでもなく、科学的思考が成長し始めた端緒の時代にあっては、数量化出来ない世界の領域はあまりに巨大であり、対する科学の領域は極微少なものに過ぎなかったのである。ところが19世紀後半に進んだ科学的技術の大衆化の時代に、科学的方法の原則に過ぎなかったものが、急速に新しい世界観となってしまふ。元来は不可視で、数値の及ばない世界であるはずの領域も、経済活動の対象として数値化されるか、それが不可能なら、要するに売り物にならなければ、単なる世迷い事として排除されてしまうのだ。リルケの詩行に現われる境界の排除とは、過去と現在、未来や男女、生と死、リルケ的な用語で言えば、見えるものと見えないものの差異を解消することではなく、見えない世界を排除し、画一化された世界を必要とする技術革新の時代の世界観の打破なのである。従って、リルケの要求する世界とは、差異を生むものとしての境界の存在しない世界ではなく、差異の併存する世界であり、見えるものの隣に見えないものが存在していると

見なすような世界観だということになる。上記引用したソネットの「なぜなら、アテネの日々、エジプトの神あるいは鳥は、なお、／いかに深く、我々に接合していることか」という詩行はまさにこのような世界観の上に成り立つものである。

このように見てくるならば、リルケにとってのエジプト的なものの位置づけを、キリスト教的な二分法の世界観に対するものと捉えるよりは、計算可能なものに全ての価値を集中させてしまう現代的な世界観とは異なるものの象徴と見なすべきだろう。また、エジプト的なものをキリスト教的な世界観のアンチテーゼとして捉える見方自体が、二分法的思考であり、リルケの提唱する世界観がこの二分法自体を否定するものだとするならば、リルケにおけるエジプト的なものを効率重視の合理的世界観に対するアンチテーゼとして捉える見方も不適切だということになる。古代エジプト人が共有していた世界観は、現代のそれとは異質なものであり、リルケの要求する、境界づけや、排除することのない世界観と同種のものであると考えられる。しかし、上記の詩行が示すように、これは何も古代エジプトに限ったことではなく、古代のアテネにおいても同様であり、そして若きリルケにとっては、ロシアの素朴な農民たちの姿もそのように映ったのだ。もし、リルケにとってのエジプトを、現代的世界観の対極をなす理想像として位置づけてしまうと、同種のものの中で何故エジプトが特別なのかの理由づけを探さなければならないという悪循環にも陥ってしまうだろう。リルケにとってのエジプトは、現代世界の対極をなす理想像なのではなく、我々の世界と差異を持ちながらも併存する「不可視の現存在」なのである。繰り返しになるが、併存するとは言っても、エジプト的なものと現代の我々の世界が同じだと言っているわけではない。それらは異質なものであり差異は存在する。しかし、それらの境は明確に境界づけられているわけではなく、一種の連続性を成すものとして捉えられているのだ。このような世界観の下では、古代のエジプトも、リルケの時代のヨーロッパも、そして現代の我々も併存可能なものとして捉えられるということになる。勿論、それらの関係は数値化出来るものではなく、可視的なものでもない。従ってこのような世界観を構成する為の基盤は、人間の想像力と直感だと言うことになる。

### 3.2. 動的性質

後期リルケの作品の中で、リルケのエジプト体験を基にしたエジプトの遺跡、風景を形象化した詩行としては、『CW 伯の遺稿より』のⅦ、「あれはカルナックでのことだった」(KA II-174~176)で始まる詩と10悲歌が挙げられる。第10悲歌は、上記したように「嘆きの国」の詩行の部分であり、『CW 伯の遺稿より』のⅦは、ほぼ全行がカルナック遺跡に関する詩行からなっている。従来の研究では見過ごされてきたことだが、この2つのエジプト的なものの詩行には、共通点がある。1つには、エジプト的な風景、遺跡の描写を、詩的自我からの視線ではなく、第三者を登場させて行っているということ。すなわち、『CW 伯の遺稿より』では、CW 伯自身であり、第10悲歌では「若い死者」がそれにあたる。次に、この2つの詩とも現代批判の詩行を含んでいるということである。第10悲歌では、周知のように、現代の街は「嘆きの街」として否定的に形象化されており、『CW 伯の遺稿より』では、以下のような詩行となって現われている。「そこでは、人も動物も／／傍らに、もうけを引きずり、神は、そのもうけを関知せず、／(…)／人はただ行為を行い続け、／大地は、調達可能なものとなる。／しかし、ただ値踏みだけをやるものは、放棄するものなのだ」(KA II-176)。この2点の特徴は、一見すると互いに無関係のようだが、実は後期から最後期にかけてのリルケの詩論の基盤を通じてつながり合っていることを明らかにして

行きたい。

共通点の2点目である現代批判の内容については、前節で考察した通りである。可視的なものと不可視のものが差異を保ちながらも併存する世界と、混在しているものを分類し、数値によって客観的に捉えることの出来ないものを境界の向こうへと排除してしまう現代の世界観とは相容れないものだ。上記した『CW 伯』の「人はただ行為を行い続け」という詩行は、第9悲歌の「形象なき行為」という詩句と重なる。『CW 伯』のⅦには、エジプト的な世界を以下のように表わす詩行がある。「(…)そして、ここではそれが捉えられていたのだ、／決して隠されることなく、また読まれることもなかったものが、／すなわち、世界の秘密が。それは、その本性においてあまりにも秘密であるが故に、／隠されていることに適していないのだ」(KA II-175) (強調部は原文による)。キリスト教的な文化背景を持つヨーロッパの研究者は、このような詩行に遭遇するとどうしても神学的な概念である「顕現」と結びつけて解釈してしまう。彼岸と此岸を境界づけて捉える二分法的思考の中では、聖なるものと俗なるものの接触は、「救済」と「顕現」に限定されざるを得ない。すなわち、此岸から彼岸への「救済」と彼岸から此岸への「顕現」である。救済は、生から死への移行に伴って生じると考えられており、それ故ある意味では彼岸の領域における現象であって此岸的な可視の領域には直接関わらない。しかし、此岸における聖なるものの顕現は、本来不可視であるものの可視化であって、極希な瞬間にのみ生じる、「奇跡」とされるのだ。上述してきた我々の論から見るならば、『CW 伯』のこの詩行をそのように捉えることは出来ない。『CW 伯』の詩行は、確かにエジプト的な世界をアンチクリスト的に位置づける要素を含んでいる。また産業革命と近代化がヨーロッパにおいて先導的に行われた事実は、現代批判とキリスト教批判が、ある部分で重なり合う事態をもたらしてしまう。いずれにしても、『CW 伯』の詩行における「世界の秘密」の開示は、不可視である聖なるものの可視化ではない。また、それは「頭で考えられた」、数量化の領域における現象でもない。従ってそれは「読まれることは」出来ないのである。「世界の秘密」は、目に見えることもなく、概念化されることもなく、なおかつ我々の直ぐ隣に在るものなのだ。『CW 伯』の詩行は、「世界の秘密」の発見自体に価値があるとしているわけではない。そうではなく、可視のものが不可視のものと併存する世界観の発見と、そのような世界観の下に発展した文化の体験に意味があるとする詩行なのである。不可視のものが全て「世界の秘密」になるわけでは無論ない。「世界の秘密」と言われるものも、不可視のもの1つとして、可視的なものの直ぐ隣りに存在するのである。

前節で述べたように、後期リルケの詩論の基盤となるこの世界観においては、過去と現在、生と死、可視的なものと不可視のものとの境は、曖昧なものとしてされている。換言するならば、それらは「境界」を形成するものであってはならず、そのことによってリルケの言う差異の併存する世界は成り立ち得るのである。過去や死、すなわち不可視の世界は、我々の理性による認識の及ばない領域である。リルケの詩論においてもそれは厳然たる事実であり、むしろ不可視的な世界の存在を前提とするリルケの詩論において、それはより切実に捉えられるものとなる。不可視の世界を虚構であるとする世界観においては、我々がそれを認識出来ないことは当然であり、悩むべき問題ではない。さらに、世界を客観的事実の構成からなるものとして捉えるための原則は定点観測にある。Aを基準としてB、C、D、までの距離を測るためには当然Aは動いてはならないのだ。リルケの詩論の基盤となる世界観においては、この原則は逆のものとなる。すなわちAは常に動いているものとして存在しているということだ。

このリルケの詩行の背景となる世界観における動的性質には幾つかの側面がある。まず、この

差異の併存する世界は、空間的にも時間的にも均質ではなく、Aの位置決定がそもそも不可能だということである。つまり空間自体が動きの中で構成されるため、Aは相対的に常に動いていることになる。これは、リルケの詩的世界観の本質における動的性質と見なすことが出来る。次に、上述してきたように、リルケの詩的世界観は、現代社会のそれと相反するものとして捉えられており、固定化と境界づけの現代的な世界観に対抗する手段としての動的性質を挙げる事が出来る。すなわち、「境界」を無効化するためにはそれを「通り抜けて」行く必要があり、静的な位置決定を避けるためには、自ら常に動いていなければならないということになる。この流動性は、リルケの世界観の性質でもあり、可視的なものと不可視のものとの境は流動的で、それ故その両者は、常に互いの領域へと侵入し合う状態にあるのだ。ただし、我々の認識の及ぶ範囲はあくまでも可視的な領域に限定され、我々は可視の領域に侵入した不可視のものも、不可視の領域に入った可視的なものも「知る」ことは出来ないのである。

『CW 伯の遺稿より』のⅦと10悲歌の双方において、エジプト的なものの風景が第三者的な登場人物によって体験される形で形象化されることは、以上のような動的な性質の下に解釈することが可能だ。これに関し第10悲歌により明確に現われている点として、「境界」越えの特徴を指摘出来る。現代社会の象徴である「嘆きの街」から、「思い出」や「恋人達」の領域である「街の周辺部」、そして死者のみが入ることの出来る「嘆きの国」へと、詩行は展開していく。そのいずれもが、現代社会の世界観の下では厳密に境界づけられる領域なのだ。「嘆きの街」の住人にとっては、街の周辺部はいわば役立たずの恥部であり、切り捨ての対象である。それを越えた「死の世界」は、「街」の住人にとって既におよそ無関係の領域だと言えよう。第10悲歌の詩行は、それらの「境界」をまるで何もないかのように越えていき、そのことによって自らの基盤となる世界観を表象している。「嘆きの国」で姿を現す「嘆き」と「若い死者」は、「頭の中で」作られた境界を越えていく詩行そのものを形象化したものなのである。『CW 伯の遺稿より』のⅦでは、第10悲歌ほどは明確ではないが、リルケと同様ヨーロッパ世界の住人であるCW 伯が、異郷であるエジプトの遺跡に分け入っていく行為を、第10悲歌の詩行の原型と見なすことが可能である。

次にこの境界越えの体験が、詩的自我、すなわち詩行における「私」の視点からではなく、第三者的な視点から捉えられている点について見ていこう。これは、差異の併存する世界における位置決定の不可能性を背景として見なすことが出来る。すなわち、世界における唯一の主体である「私」は、そのまま中心としての機能を果たすものであり、位置決定の可能性へとつながってしまうのだ。リルケの意識の中で、この近代的自我の問題がどこまで明確なものであったかについては、ここでは詳細に立ち入らない。しかし、自らの背景とする詩的世界観の中で、詩的自我に固執することの危険性は直感していたと推測出来る。『CW 伯の遺稿より』のⅦと第10悲歌の詩行は、この位置決定の機能を持つ「私」を回避した結果生まれたものと見なすことが出来るだろう。さらに、この双方とも同伴者を伴っている点、『CW 伯』においては、愛人エレヌ、第10悲歌においては「嘆き」、にもこの脱主体化の傾向を指摘することが可能だ。例え第三者の形象を与えられ、動きの中に置かれていたとしても、CW 伯、あるいは若い死者が単独であった場合、それが中心点につながる危険性は排除出来ない。しかし、彼らに同伴者がいることによって、しかもそれらが異性の同伴者であることによって、彼ら自体も差異を含んでいることになる。『CW 伯の遺稿より』のⅦや第10悲歌の詩行では、彼らは差異の世界を経験するものとして現われている。しかし、最後期の詩行ではむしろ差異を含んだ動きそのものから、差異の併存する世界が創られる所まで行き着く。このような展開を考慮に入れるならば、CW 伯や若い死者の創り出す動き

は、詩行そのもののメタファーであるとも言えるだろう。そのように見た場合、CW 伯とその愛人、「嘆き」と「若い死者」という差異を含んだ動点は、多義性を本質とする詩のコトバのメタファーに他ならないのだ。

#### 4. リルケにとってのエジプト

以上、リルケとエジプト的なものの関係について、事実面と作品面から考察を加えてきた。まとめとして、リルケにとってのエジプト的なものの意味を問う段階に来ているだろう。リルケが、エジプト的なものに特別な関心を持っていたことは紛れもない事実である。ロダンのアトリエやルーブルで古代エジプト美術、特に彫刻関係のそれに触れたことを皮切りに、妻クララのエジプト滞在を経過してその関心は本格化したと言える。その後、自らの詩人としての危機の期間に、状況の打破と状況からの逃避、双方の意味合いを持ったエジプト旅行とそれに続くエジプト研究の試みを為している。また、危機から回復した後に出会ったファラオの頭像からは、特に深い感銘を受けたことは数々の手紙が証明している通りだ。リルケの場合、問題となるのは、これらの興味関心、研究が創作へと一直線につながらないということにある。A. Grimmはこの点について、リルケと同時代の作家であるトーマス・マンと比較して指摘している<sup>(24)</sup>。すなわち、散文家であるマンの場合は、エジプトは小説の為の素材であり、エジプト研究はそのまま作品、『ヨゼフとその兄弟』となって結実したのに対し、詩人であるリルケのエジプト研究は直接作品化されなかったと言うものだ。Grimmのこの指摘は正しく、リルケにおいては自らの詩的世界観と融合しなければ、いかなる研究、体験も詩行化しないことは、本稿で明らかにしてきた通りである。

後期から最後期にかけてのリルケの詩論の基盤となる、差異の併存する世界にとってエジプト的なものは2つ点で重要な役割を果たしている。第1点は、古代エジプト人の持っていた世界観そのものがリルケの理想とする世界観と同種のものであり、現代の我々が持つ世界観とは別の世界観が存在し得る事例であったことである。2点目は、現代の我々から見て、古代のエジプトは時間的、空間的に異郷であって、それを我々の日常と併存する差異として捉える視点が、現代において差異の併存する世界観を構築するための条件となるということだ。リルケにとってはどちらも意味のあることだったのであろうが、現代における詩の危機を鋭く意識していた後期のリルケにとっては、後者の点がより切実な問題として感じられていたのかも知れない。

このように見てきた時、次のような疑問が生じてくる。すなわち、後期リルケの詩論が形成される過程において、エジプト的なものは不可欠の要素だったのかということだ。本稿で論じてきたように、現代の世界観とは異なる世界観を持つ文化という点では、古代のエジプトは唯一の例ではない。また現代において差異を構成する異郷としてもエジプトは多数の中の1つに過ぎないものである。このような理由から、おそらくエジプト的なものがなくてもリルケは後期の詩論を支える詩的世界観を構築し得たと考えるのが妥当である。しかし、若き日のロシア体験がそうであったように、危機の時期にあえて行ったエジプト体験は、リルケにとって重要な意味を持つものであったことに疑念を差し挟む余地はない。リルケにとって、詩的な自己同一性を欠いたままのエジプト体験は、自己解体を伴いながら差異の中を通り抜けていくというイメージの基盤となったであろう。リルケにとってのエジプトとは、現代の我々とは「異なるもの」という点において、重要な意味と機能を持つものなのだ。

## 註

- (1) Alfred Grimm, Rilke und Ägypten. Mit Aufnahmen von Herman Kees. München 1997.
- (2) 特に1913年に、ベルリンのエジプト博物館で見た発掘されたばかりのファラオ Amenophis IV-Echnaton の頭像に関しては、手紙の中で繰り返し言及している。
- (3) Rilke Handbuch. Hg. von Manfred Engel. Stuttgart 2004, S. 27.
- (4) Vgl., Werke. Kommentierte Ausgabe in vier Bden. Hg. von Manfred Engel, Ulrich Fülleborn, Horst Nalewski, August Stahl. Frankfurt am Main, Leipzig 1996, Bd. 2, S. 696.
- (5) 「定住」という概念が、家族制度を基にする市民生活と不可分のものだとするならば、10歳時の両親の別居時に、リルケは既に定住性を失っていることになる。リルケ自身の結婚生活によってもこの定住性は回復されなかった。
- (6) リルケは1901年に彫刻家のクララ・ヴェストホフと結婚し、ドイツ・ヴェスターヴェーデに新居を構えた。パリへの移住は夫婦関係の破綻が原因ではなく、家庭生活と創作活動の両立が、リルケとクララの双方共上手く行かなかったため。パリへは、クララも同行しているが、住居は別。
- (7) 同じ芸術家として、クララはリルケの生活習慣、家族と過ごす時間もその意志も殆ど持たないこと、等に対して理解を示していたようだが、パリへ出てから5年を経過したこの頃には、夫婦関係もかなり緊張したものになっていたようだ。
- (8) Rainer Maria Rilke. Briefe in zwei Bänden. Hg. von Horst Nalewski. Frankfurt am Main und Leipzig 1991, S. 231-233.
- (9) Rainer Maria Rilke. Briefe aus den Jahren 1906 bis 1907. Hg. von Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber. Leipzig 1930, S. 170-171.
- (10) 3月8日付けの手紙。ebd., S. 213-216.
- (11) ebd.
- (12) 2月5日付けの手紙。ebd., S. 180-182.
- (13) Anton Kippenberg は、Insel 書店の店主。手紙は、1910年11月5日付け。  
Rainer Maria Rilke. Briefe an seiner Verleger 1906 bis 1926. Neue erweiterte Ausgabe. Hg. von Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber. Wiesbaden 1949, S. 108.
- (14) a.a.O., Bd.2, S. 443.
- (15) a.a.O., S. 93-255.
- (16) 1911年1月18日付けのクララ宛の手紙の中でこのように書いている。
- (17) a.a.O., Briefe an seiner Verleger 1906 bis 1926, S. 114
- (18) Rainer Maria Rilke. Die Briefe an Karl und Elisabeth von der Heydt 1905-1922. Hg. von Ingeborg Schnack und Renate Scharffenberg. Frankfurt am Main 1986, S. 173.
- (19) リルケはパリに戻った後、パリやベルリンの大学でエジプト関係の講義を聴く計画を立てている。また、当時のドイツにおけるエジプト学の先導的研究者とコンタクトを取り、遺跡発掘に同行するプランも立てている。
- (20) この頭像を主題とした詩は、1913年ベルリンで試みられているが、殆ど行分けすらされていない未完の状態で見られている。  
a.a.O., Kommentierte Ausgabe, Bd. 2, S. 62 f.
- (21) 註(4)参照。以下この全集からの引用部には末尾に巻数と頁数を記す。
- (22) KA II, S. 781.
- (23) 拙論、「R.M.リルケの魔術的言語の詩について」岐阜聖徳学園大学紀要46集 1頁～16頁、参照。
- (24) a.a.O., Alfred Grimm, Rilke und Ägypten, S. 12 f.